



Title	土橋家旧蔵書目録（三）
Author(s)	
Citation	語文. 1955, 15, p. 45-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68484
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

土橋家旧蔵書目録(三)

五 河瀬菅雄著述

1 奉納三吟和歌

一冊

縦二十三種、横十六種。仮綴表紙共十四枚。三吟とは菅雄・妻・娘の詠作の意。内題「奉納天満宮三十首和歌 源菅雄独吟」とあり、関路初春以下二十九首の題詠和歌をならべ、つづいて「十首和歌 源氏妻近子独吟」とあつて、嶋花以下九首の作、終りに「三十首和歌 源氏女幾子独吟」とあつて歳暮立春以下の同じく題詠和歌がある。

右一卷者雖井蛙之況吟有幸奉納聖廟之齋庫者也

干時元祿十四辛巳曆九月吉辰

源	菅雄
妻	近子
女	幾子

といふ奥書がある。

2 備中日記

一冊

縦二十五種、横十六種。表紙は藍色の濃淡による細かい市松模様。題簽に「備中日記全」とある。本文五十七枚。

本書は、元祿十五年筆者五十六才の時、かねて在京の知人妻木某

を介して、備中倉敷の篤学者藤井規英よりの招きを受けてゐたが、いよいよその切なるに動かされ、かつは万葉伊勢源氏源平の歌枕や遺跡の見物かたがた下向することになった。その時の旅日記である。

出立にあたつて贈られた田代春雄、山脇菅正、飯田乗悦、佐々木高陽、娘幾子らの餞別和歌が記されてゐる。七月十八日京をたち大阪の堀木町に宿る。十九日倉敷よりの差配で迎へに上つてきたといふ舟が用意されてゐた。舟では「名所たづねんには心にまかする事もかなひかたく侍るべし。かち路をゆかん」といひながらも舟で西行していつたが、大物の浦より紀路がはるかに見えて、京にゐては到底見られぬ景色だと感動したなどがある。海路を主に。適宜陸行したらしく、途中、楠氏之墓、人麿祠堂などの碑銘を書きうつしたりしてゐる。廿二日片上まで来ると「所の掟とて舟にのりたる人をかたはしづつあらため」たとある。そこには倉敷よりの迎への人も来て待つてゐた。廿三日倉敷につき、漸く藤井氏にあひ、その後一ヶ月余りこの地に滞留したのであるが、その間川に出て魚をとりなどしてゐる中に口をついて出るのは百人一首の歌であつたなどと記してゐる。この年七月は小で、廿九日は晦日、酒津川が増水し、倉敷の町まで水が来るといふので睡いだとある。八月二日都より便りがあつて娘幾子の和歌などが書き記されてゐる。九日吉備津社へ北東三里許りの道をゆく。滞留中、岡直敏といふ人の案内で倉敷近傍

を歩いたり、その家に招かれたりしてゐる。また、古今集序や源氏物語、論語などを講じたり、和歌を詠んだりもしてゐる。閏八月六日（七月が小で、閏八月があるので、この紀行の書かれた年を元祿十五年と推定したのであるが、文中には老境にはひつたことをものべてゐる）にやうやく倉敷を立ち帰路についた。九日大阪について、十日「三条二条のわたりをもすぎて家やどさへちかくなれば、待らん事など思ひつついそぐを、ほどなく万年橋のほとりかた折戸したる草の庵にはひ入待るも年ふりぬる住家なれば、また心やすし」とこの旅日記を結んでゐる。

3 試筆和歌

一冊

縦二十五糎、横十七糎。仮綴表紙共十三枚。初めに「試筆中院大納言通茂卿」とある和歌にはじまり、菅雄及びその妻子らのも含めて八十五首を収む。菅雄を中心とした在京歌人の試筆和歌集。二葉目おもてに「元祿十七甲申曆」とある。

4 醉露翁加草（仮題）

一冊

縦二十九糎、横二十一糎。藍色表紙の装幀。題簽はない。本文三十三枚。

宝永三年菅雄五十才の時の題詠和歌を四季・恋・雑に部立し、加点したもの。巻頭は

春 元日

古としにまつ立初し春かすみ霞て今朝は空そ長閑き

5 手丹衷波口伝

写本 一冊

縦十八糎、横十五糎の胡蝶装の枳形本。和歌連歌制作のために、主として助辞の用ひ方につき用例をあげて説明したもの。例へば

「にて」「る」の事

にて、とる、には上にを・は・も・からぬの文字なくてはかなひかたし

恋は、たた身をづらかれのしはさにて、
長からぬ世にこそおしき命にて、

の如くである。跋があつて「夫和歌は我御門の御道なれば秋津嶋に生れし身のゆるがせにすべき事かは、されど歌のおこりはふりにし文どもに多いへれば、今さらおろかなる筆にわづらはれむもおほけなし、ただてにをはのつづけがらこそ第一なるべけれ。てにはのこやうなるはいひしらぬから、人の物語どもいたまし。その道のならひをもつたへきかで、をのが心のくま／＼にまかせたらんは誠におそろしきもの前後につまつきけるがごとくなるべきをや」とあり、奥に

右之一巻者雖伝来之秘事以執心故授与之最不可許外見者也

享保六辛丑年五月 日

醉露堂 源 菅雄

花 押

とある。また本書には次の書を、つづけて写してゐる。

手爾衷波切紙

内容は、つつといふ事、物かといふ事、かといふ事、そらんの事、何のあるといふ事など十一項目をあげ、右書と同方法をもつて略説用例をかかげてゐる。これにも跋があつて

右の詞いつれも一旦にては心得かたくなむ、和歌の意味をよくあちはひて工夫すへし、是等は常にあることなれど是非人のこころをつけぬ故に上下の首尾あひかたきなるべし

享保六辛丑年九月 日

土橋宗信丈

醉露堂 菅 雄

とある。土橋宗信は土橋友直の分家筋に当る。節齋良慶と号し、連歌を西山宗春の門に遊び、歌道を河瀬菅雄に学んだ。友直を助けて含翠堂を創設した人である。

また奥書には「右先師醉露翁河瀬氏の伝へられしところ也。保長らが志をつぎて学びんことをこふにより授けあたへ侍りぬ。よくよくみ、よく味ひて河瀬のながれたちやらす菅のねの末ながく此道にまとはつらむことをこひねがふことしかり 寛延元戊辰年閏十月日節齋良花押」とある。保長といふのは後出「古今見聞抄」を校合・書写した友直の養嗣子敬直のことで、包白と号した人である。

6 古今見聞抄

写本 二十冊

縦十六・五釐、横二十二・五釐。薄茶色表紙の装幀で題簽がついてゐる。全五十巻、おほよそ二巻を以て一冊としてゐるので、なほ数冊が缺けてゐることになる。すなはち缺けてゐるのは、第五巻から第九巻までと、第十二、十三巻、第廿八、廿九巻、第四十巻から四十三巻の十三巻である。現存二十冊のうち、第四十八、四十九、五十の三巻だけは一巻を以て一冊としてゐる。

各巻には包白の奥書があり、書写・校合をした人をその手跡によつて推断し、かつ書写本の校合に菅雄の稿本を用いた巻々と、書写本が缺けてゐた為に稿本から包白が書写して補つた巻々とのあることを夫々の奥書に示してゐる。それを表示すれば次の如くである。

番号	巻数	書写した人	校合者	備考
一	一	如幽	伯父誠齋	以本書再校合包白
二	二	貞順	同右	同右
三	三	誠齋	同右	同右
四	四	貞順	同右	同右
五	五	貞順	同右	同右
六	六	貞順	同右	同右
七	七	貞順	同右	同右
八	八	貞順	同右	同右
九	九	貞順	同右	同右

廿五	無書写本以本 書写包白	第廿五巻以後における書写本の有 無をここに書く。
十	廿六 廿七 同 右	
廿八 廿九		「九」の奥書によれば「有書写本」 とあるが現存しない。
十一 卅一 卅十	包白	本。第四十巻から第四十三巻まで缺 本。
十九 四十	包白	「十」から、この「十九」まで、奥に は「已未七月晦日書写(朱)已未九月 二日校合の如く書写校合の月日を 書くのみである。
二十五 五十	同 右	以菅雄翁并菅野兩人自筆之本於泉 州貝塚覺真堂書写 元文已未八月廿二日包白(朱)同九 月十二日一部校合判

右表中、如幽とあるのは三上令直の号で、貞順はその娘、名を豊と言つた。誠齋とあるのは土橋友直の号で、貞順はその妻である。この書を現存の姿で残した包白が、「伯父誠齋」と書いてゐるのは、彼が誠齋の甥にあたるからである。

「土橋氏三上氏三宅氏過去帳」及び「土橋家系図」によれば、包白は前項にもふれた通り、友直の養嗣子であつたが、元文四年(二十二才)土橋家を出て、しばらく泉州貝塚の実家にとどまつてゐたやうである。奥書によれば、包白が、友直や、その妻や義父の手跡になる本書を校合したり、その缺けた巻を菅雄の稿本から書写して

補つたりした元文四年七月から九月といふのは、右の実家にとどまつてゐた間のことであつたことがうかがはれるのである。

本書の大尾には「洛之西衣笠岡麓吟阿堂専雄」なる自署のある跋文がある。それによると、本書は、菅雄が洛西太秦の惣持院といふ僧坊の住持と親交があつて、そこに三年許り住まつてゐたが、集る人々に和漢の書を講じた。その中に、古今和歌集に興味をもつものあつて、彼らのために諸抄に略してゐるところ、誤つてゐると思はれる点などを説きあかしたが、やがてそれらに、自説を加へて一部となし、名付けて古今見聞抄したものが本書であるといふ。

7 百人一首さねかつら

八冊

縦二十三糎、横十七糎。砥粉色木目模様の表紙を装した写本。題簽には「さねかつら」とあり、本文一葉おもてに「百人一首左禰葛巻一河瀬氏菅雄撰」とある。

総論は「和歌蓋鰯」「題号読曲」「百人一首編撰」「定家卿系図」「当書編撰意趣」「於新今古不審」「百人一首花実」「百人一首作者」「百人一首相伝」といふ項目を立ててゐる。

宗祇、幽齋以来の百人一首の旧注に従ひつつ私見を加へたもの。本書は近代名家著述目録をはじめ国学者伝記集成その他に「百人一首玉葛」とあるものと同一であると考へられる。それらには冊数も記してゐないところからあるひは本書の書名を誤り伝へたものであるかと疑はれる節もあるが、さうした別称で呼ばれたことがあつたのかも知れない。

附記 河瀬菅雄のことについては本誌第十三輯、「伊勢物語辭露について」を御参照願ひたい。

(八木 毅)